

伴走者型支援のためのシステム開発

成蹊大学
学習院大学計算機センター

教授 勝 野 喜以子
教授 入 沢 寿 美

1. はじめに

大学教育の変革が進められる中で、大学では Faculty Developer (FDer)、Institutional Researcher (IRer)、University Research Administrator (URA) といった従来の教授職とも大学職員とも異なる新たな職種が誕生している。これらは Third Space Professionals と称され、これまでの職種では担えなかった隙間を埋めるための職種であり、これまでの大学教職員とは異なる特徴を持つ。例えば、学生に対する授業だけでなく、同僚の大学教職員に対するワークショップの開催や教育改革や対外研究促進の支援など、これまでの大学教職員という枠組みでは測れない働き方を要求される。また、ロールモデルとなるような先達や育成方針がないため、その職種に必要とされるスキルや能力についても明確になっているわけではなく、各自が手探りで自己研鑽し、業務を進める場合がほとんどである。また、学問分野として確立していない分野のため、様々な分野から（多くの場合は任期付きで）人材が採用されており、先に繋がるキャリアパスも不明瞭であるため、非常に不安定な状態に置かれている。また、学内に同じ立場の同僚がいない（もしくは少ない）場合が多く、悩みを共有したり、相談したりというのが難しく、日々、模索を繰り返しながら、仕事に取り組んでいる。

我々はこれらの Third Space Professionals に対するサポート体制を模索し「伴走者型支援モデル」を構築した。本モデルは、横を共に走る伴走者のような支援により、これらの人が仕事をしている日常の文脈を重視するサポート体制であるが、支援者が身近にいるとは限らないため、遠隔地から支援を実施するためのシステムが必要となる。

そこで本研究では、「伴走者型支援モデル」を実施するためのシステム基盤を開発することを目的とした。

2. 伴走者型支援モデル

伴走者型支援モデルでは、Third Space Professionals に対する支援モデルとして構築されたもので、支援を必要としている人 (FDer、IRer、URA 等) を走者、支援する人を伴走者と称する。伴走者型支援の目的は「自立した職業人の育成」であり、理念として (1) 指導するのではなく、走者のリフレクションを促す (2) 協働しない (実施・実行を手伝わない、) ということ掲げている。(リフレクションとは、出来事を再構成し、そこから反省点や改良点を抽出する発見的作業である。)

これまでの高度専門職に対する支援の形態としては、

- ネットワーク型：情報共有や意見交換を目的としたコンソーシアムなど

- 研修型：特定の専門的知識，スキルを身につけることを目的とした研修会など
- ツール型：スキル標準，評価指標など

などがあるが、いずれも研修会のみで終わるものが多く、日常的な文脈に落とし込むことが難しい。そこで伴走者型支援モデルでは、リフレクションを支援するような形式にすることにより、日常的な文脈を取り扱いやすくし、実務とかけ離れない支援を目指した。これにより、走者の業務の大幅な増加を防ぐことができる。また前述したように Third Space Professionals の特徴として近くに同僚がいないため、協働することは難しい。そこで、本モデルにおける伴走者の役割は、走者のリフレクションを促し、走者に客観的な視点を与えることで、走者の成長を促すものであり、伴走者は走者の実践を協働しないことと、遠隔地からの同業者によるサポートを可能にした。

図 1 の左側は伴走者型支援モデルの実施の流れであり、右側は伴走者型支援を実施する際にリフレクションを促す仕掛けとして開発したワーク類である。①パートナーマッチングは、伴走者と走者をマッチングする作業である。ここで、単にマッチングするだけでなく、走者と伴走者の距離感を縮めるために属性ワークを行う(属性ワーク：客観的な視点を用いて、自分の置かれている現状の立場と将来的な立ち位置をどうしたいかを探るワーク¹⁴⁾)。なお、実際に伴走支援を展開していく際には専門家団体とのタイアップなどで一定数の伴走者を確保するか、WEB ページなどでの広報を通じて登録を促す方法を模索する必要がある。次の段階として、走者と伴走者で相談をして、支援機関と伴走の目標を設定する。ここでもスムーズな目標設定のために開発された ICE(Ideas Connections Extensions) モデルワークを用いる。

実際の伴走は、②～⑤で行われる。詳細は 3 章で解説するが、伴走者は定期的なミーティングで走者のリフレクションを促し、報告書を共有することが必要となる。ここで、走者と伴走者間での情報の共有が必要になる。本研究では主にこの部分を遠隔で行うために

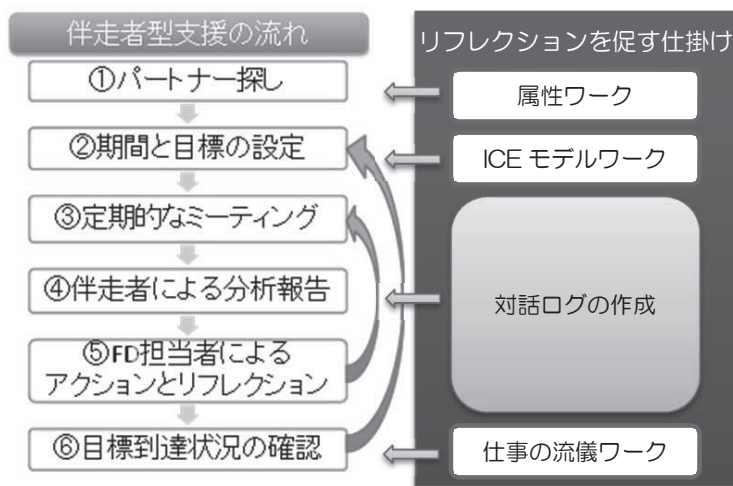


図 1：伴走者型支援の流れ

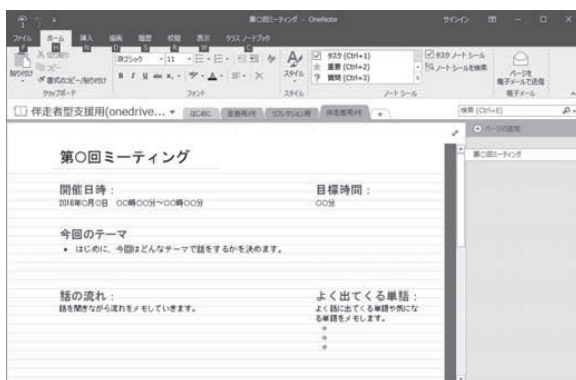
どのようなシステムが必要かを検討した。

最後に到達目標の確認が必要となるが、パイロットスタディの際には「仕事の流儀」ワーク用を用いたり、ポスター発表形式を用いたり、ケースによって変更している。遠隔での支援になった場合には、この部分にも検討が必要となるが、今回は検討していない。

3. パイロットスタディ

伴走期間（図1の②～⑤）の目的は、日常的な文脈に対するリフレクションを促すことが目的である。毎週（もしくは定期的に）ミーティングを行うことで、走者の日常的問題に関する取り組みを題材にした対話を行う。伴走者は話し合いの内容やキーワードなどをメモし、報告書を作成する。走者は伴走者の作成した報告書を見て、リフレクションを行い、次のアクションにつなげていく。ここで伴走者は「相手の見ている世界を映し出す」ことを目指す。走者はリフレクションとして「伴走者の映す世界をみて、多角的視点を手に入れ、自らの世界を再構築する」ことを目指す。

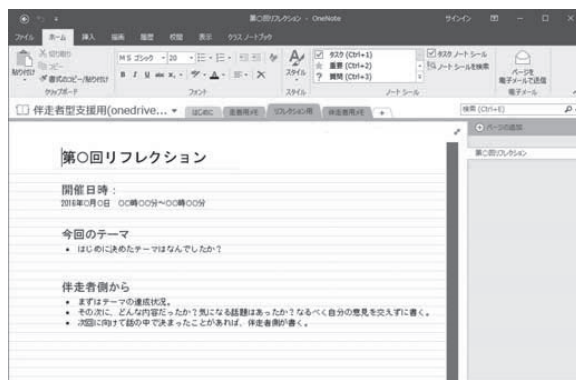
本研究では、特にこれらを実現するために専用サイトの構築なども検討したが、維持メ



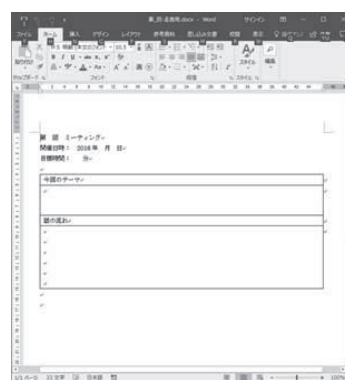
(左) 伴走者用 OneNote 版



(右) 伴走者用 Word 版



(左) 走者用 OneNote 版



(右) 走者用 Word 版

図 2：画面イメージ

メンテナンスをどうするか？セキュリティをどうするか？といったことが問題となった。また今回パイロットスタディを実施した広島大学の URA(University Research Administrator)の場合、実際には遠隔地で行ったわけではないということと、業務内容の外部流出を避けるため、伴走の報告書の共有には広島大学のシステム利用する必要があった。広島大学の Office365 を利用した。具体的には、入力用のテンプレートを Word と OneNote で作成し、どんなものが利用しやすいかを検討してもらったこととした。(話の聞き出し方やリフレクションの仕方に関するマニュアルも作成し、OneDrive 上においた。)作成した OneNote 版と Word 版の画面イメージは図 2 のとおりである。

今回のパイロットスタディは、広島大学の URA (20 名) に走者と伴走者に分かれてもらい 10 チームで行った。前述のように、同じキャンパス内で伴走を行っているため、オンライン以外の利用を許可しているため、今回、オンライン版を利用したのは 2 組のみであった。いずれも Word 版で OneNote 版を利用した人はいない。これは後にわかったことであるが、OneNote 版が使われなかった理由は、そもそも OneNote を使用したことがある人がいなかったためであった。(今回の実験までは Office365 もメール以外は利用されていなかった。)あとの 8 チームは対面で実施しており、7 チームは Word 版を印刷して対面で使用していた。

4. 結果

これまでのパイロットスタディで、伴走者と走者がそれぞれの役割を全うできないケースとして

- (1) リフレクションを促すような質問になっていない
- (2) 伴走ではなく協働してしまう
- (3) ペアの相性が悪い
- (4) リフレクションの意義をわかっていない

といった問題があることがわかっている。今回のパイロットスタディでは、リフレクションを促す方法に関する事前トレーニングを行い、伴走者のためのマニュアルや、走者のためのリフレクションマニュアルを用意し、随時サポートも行ったため(1)と(4)については、回避できたが、(3)ペアの相性が悪いというケースは 1 例発生した。また、(2)協働については、かなりの割合で発生していたが、オンラインを利用したチームの方が協働しないで進められていた。もう少しサンプル数を増やした実験が必要ではあるが、実際には近くにいなくてもオンラインになることで、心理的な距離が遠くなり、協働を回避することができるのかもしれない。しかし、オンラインを利用したチームの方が、リフレクションが促進されなかったようであった。リフレクションの促進度については、評価方法の検討も必要である。

なお、対面で実施し Word 版の印刷も使用しなかった 1 チームは、伴走者が走者の話を聞きながらキーワードをイメージマップのようにして書き込んでおり、これを走者もその



図 3 伴走者型支援の WEB サイト (左) と伴走者と走者のためのループリック (右)

場で見ながら対話を行っていた。このチームは伴走者型支援が特にスムーズに実施されていたため、実施後にヒアリングを行ったところ、この走者は「自分の話がイメージマップ化されることで、自分の頭の中が整理されるとともに、何を情報として話していないのか、何が伝わっていないのか、といったことが明確になって、話しやすくなった」と述べている。イメージマップを活用したメモの取り方には訓練が必要ではあるが、今後検討の余地はあると考えられる。

本研究では、伴走者型支援の方法を紹介し、パートナー募集やマッチングを行うための WEB サイトを作成した (図 3 左図)。今回作成した伴走者用と走者用のマニュアルやオンライン用のフォーマットも掲載している。さらに、マニュアルをもとにした伴走者と走者のためのループリックも作成した (図 3 右図)。今後は伴走中にループリックを用いて、自分の伴走状態を分析するとともに、ループリックの結果を伴走者と走者で共有することで、より良い伴走者支援が実施できるように改定する予定である。

伴走者型支援の問題として、伴走者の確保やパートナー探しのためのタイプ診断 WEB テスト、定期的なミーティングのためのコネクション方法の確率や分析報告やリフレクションのための情報共有スペースの検討、進行状況を可視化するための進行チェック表などの導入検討が必要であると考えられる。これらの遠隔地にいることをフォローし、コミュニケーションを円滑に行うためのセキュアでシステムをどう構築し、維持するかは今後の問題である。

<参考文献>

[1] 日本教育工学会 第 31 回 全国大会講演論文集, 2015-09-21